実践英語音声学 2 (2021) 33–47
研究論文

ランカスター英語の母音特徴*

三浦　弘
専修大学

要旨

現在のランカスター英語方言の母音特徴を分析し，他のイングランド北部英語や一般イギリス英語 (GB) と比較して考察する。単一母音では CLOTH 母音と PALM 母音に特徴があり，GB 同様に GOOSE 母音の前舌化，及び THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音の融合と狭母音化が進行していることを示す。また，FOOT 母音と STRUT 母音が同じ音素であるとは言えないことを音響的な音声分析のデータから証明する。さらに NURSE 母音では綴り字が <ur> の単語と <ir> の単語では発音に差異が見られることも実証的に示す。同様に二重母音についてもイングランド北部英語の伝統的な特徴の保持と新しい変化について論じる。

キーワード：ランカスター英語，GOOSE 母音の前舌化，FOOT 母音と STRUT 母音の分離，旧軟口蓋摩擦音語群，GOAT 母音の後舌広母音化

1. はじめに

イギリス各地の地域方言が平準化（dialect levelling, dedialectalisation）しつつある現在，どの地域の母音特徴も 21 世紀の「一般イギリス英語」(General British, 以下 GB) に収斂されていく流れはますます加速している。

イングランド北部の都市，ランカスター (Lancaster) は，ランカスター大学が「板ガラス大学群」(plate glass universities) の 1 つとして 1964 年に開設されて以来，人々に大学の町という印象を与えている。しかし，ランカスターはランカスター朝初代のイングランド王，ヘンリー4 世以降現在までの 600 年間，「ランカスター公」(Duke of Lancaster) をイングランド王（イギリス君主）の称号の 1 つとしている歴史の町でもある。

2019 年 9 月にランカスターにて高齢の地域住民からランカスター英語の音声収録を行った。ランカスター英語が伝統的なイングランド北部英語をどの程度保持しているのか，現在の母音特徴を分析し，資料として記録に留めるために報告する。

2. 方法

2.1　被験者

被験者は全員男性で，年齢と職業を (1) に記す。なお，被験者番号の M は男性被験者の略号であり，番号は収録順を示す。また続く数字は収録時の年齢である。被験者との面会と録音は 55 歳以上の社交クラブである「フレンドシップ・センター」にて，及び被験者宅への個別訪

* 本研究は JSPS 科研費 JP17K02821 及び JP20K00684 の助成を受けたものである。また現地調査での被験者募集において，ミック・ショート教授（Mick Short，ランカスター大学名誉教授）に斡旋の協力を得た。ここに記して謝意を表したい。

問によって行った。

(1) ランカスターの被験者

M1　74　元鉄道保線員
M2　62　庭師
M3　84　元建設作業員
M4　89　元機関車運転士
M5　78　防犯巡視員
M6　81　元看護士長
M7　64　溶接工（鉄工所経営者）

2.2　音声収録

被験者に調査用単語リストを渡し，キャリア・センテンス (Say _____, please.) に入れて，2回ずつ読んでもらった。録音機器とその設定は (2) の通りである。

調査時に使用した語彙リストは，「付録」として末尾に掲載する。Group A は筆者の調査前研究による独自セレクションであり，Group B は現在の英語音声学研究で共通して用いられる「標準語彙セット」(standard lexical sets, 以下 SLS) である。語彙リストにおける SLS の配列は Foulkes & Docherty (1999, p. 282) のリストに従った。

録音はセクション（コラム）ごと (A1, A2, etc.) に停止して，音声ファイルを分割した。なお色分けは共通する語群がわかりやすいように本稿のために追加した。被験者にはモノクロのリストを提示し，何の説明も行っていない。

(2) レコーダー: SONY PCM-D100
録音設定:
内臓マイク: コンデンサー・マイクロフォン（周波数特性 20-20,000 Hz）
トラック数: 2 （stereo）
サンプリング周波数（sampling frequency）: 44.1 kHz
量子化（quantisation）: 16-bit
データ保存形式（Audio File Format）: WAV

2.3　音声分析

音声は Praat version 6.1.02 (Boersma & Weenink 2019) を利用して，各被験者の 2 回目の発音を分析した。各母音の F1（第 1 フォルマント）と F2（第 2 フォルマント）の周波数をプロットした散布図（F1−F2 ダイアグラム）をテーマごとに作成した。それらの図を基に考察する。

3. 単一母音[1]

まず SLS の分類に基づく単一母音セット[2] のキーワードとなる単語について，その母音の F1−F2 ダイアグラムを図 1 に示す。図 1 と筆者の聴覚印象から各母音の音価は (3) と判断できる。なお，音声記号の中で使われているティルダ（~）は「あるいは」の意を示す。

---

[1] 本稿のセクションタイトルである「単一母音」「二重母音」は，20 世紀のイギリス容認発音 (RP) と一般アメリカ英語 (GA) を基準として，Wells (1982) が設定した母音の SLS に基づく標準英語の分類である。この分類は地域方言では必ずしも一致しない。特に伝統的なイングランド北部英語には，FACE 母音と GOAT 母音が単一母音となる特徴がある。

[2] SLS の各母音セットはキーワードを小型大文字で表記することになっている。

(3)

KIT	ɪ	DRESS	ɛ	TRAP	a	LOT	ɒ ~ ɔ	STRUT	ɵ
FOOT	ʊ	BATH	a	CLOTH	ɔ	NURSE	ɜː	FLEECE	iː
PALM	aː	THOUGHT	oː	GOOSE	ʉ	NORTH	oː	FORCE	oː

KIT 母音，FLEECE 母音，NURSE 母音は現在の GB とあまり差異は見られない。DRESS 母音が半広母音に近付いていることも，近年の GB と同様である。GOOSE 母音が前舌化していることは現在のイギリス全土に生じている傾向で，ランカスターでも「GOOSE 母音の前舌化」(GOOSE-fronting) が進行していることがわかる。

イングランド南部英語では中英語 (Middle English，以下 ME) の /u/ が /ʊ/ と /ʌ/ に分離して発達した，いわゆる「FOOT 母音と STRUT 母音の分離」(FOOT-STRUT split) が生じた。しかし，イングランド北部英語にはそれが起こらなかったので，FOOT 母音と STRUT 母音が同じ母音 /ʊ/ であることがイングランド北部英語の典型的な特徴になっている (Beal, 2008, pp. 131−132; Wales, 2006, pp. 20−21; Wells, 1982, pp. 351−353)。ところが音声分析をしてみると，(3) に示されるように STRUT 母音の方が若干前寄りの (advanced) [ɵ] になっている。これはランカスターに限らず，筆者の 2017 年と 2018 年の調査ではリバプール，マン島，プレストン，ブラッドフォードという他のイングランド北部英語でも同様であった。先行研究では皆 STRUT 母音が /ʊ/ になっているが，音響的な音声分析がなされていないと思われるので，STRUT 母音の方が前寄りということが近年の変化であるか否かは不明である。

GB とは違って，BATH 母音が TRAP 母音と融合していることはイングランド北部英語では一般的である。THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音が半狭後舌母音 /oː/ で融合していることは，三浦 (2020, pp. 30−33) で論じたリバプール，マン島，プレストンの方言と同様であり，この傾向は 21 世紀になってからの GB でも同じである (Carley et al., 2018, p. 144; Lindsey, 2019, p. 146)。また，LOT 母音を狭母音化した /ɔ/ で発音している被験者がいたことは，現在の GB と共通している。

興味深いことは CLOTH 母音と PALM 母音が同じランカシャー州のプレストン方言と異なることである。2018 年に収録した音声データからプレストンの単一母音を図 2 に示して，図 1 と比較する。なお，本稿の母音図は Excel を使用して作成したものなので，周波数を示す指数がログ（対数）ではなく，リニア（線形空間）になっている。そのため母音四辺形との対応はその母音領域が左肩上がりになっていることを前提に音価を読み取る必要がある。

図 2 も初出であるが，プレストンの被験者と収録方法は三浦 (2020, p. 20−22) と同一である。プレストンはランカスターから約 40 km 南に位置し，ランカスターとリバプールのほぼ中間地点にあるが，プレストン方言にはリバプール方言の影響が多々見られた。

ランカスターの CLOTH 母音はプレストンよりも狭いことがわかる。また，PALM 母音は，プレストンでは後舌広母音 /ɑː/ であるが，ランカスターでは前舌化している（/aː/）。Barras (2015, p. 274) 及び Hickey (2015, p. 18) には TRAP 母音と PALM 母音の音価が異なること (/a/ vs. /ɑ/) がランカシャー州の方言の特徴のように書かれているので，図 1 のデータはその反論となる。しかし，Barras (2015) のデータはランカシャー州東部の音声に基づいている。中部のプレストンや東部の発音が同州北部のランカスターのものと異なっていても不思議ではない。

ブラッドフォード方言でも PALM 母音は前舌化しているので，プレストンはランカシャー州の現在の州都（昔の州都はランカスター）であるために洗練されて GB に近い発音になったと言えるかもしれない。ちなみに図 3 にイングランド北部の隣の州，ヨークシャー州のブラッドフォード（2018 年収録音声，図は初出，被験者と収録方法は三浦 (*ibid.*)）の単一母音図を掲載する。ブラッド

フォードはプレストンから 70 km 東のヨークシャー州にある町である。図 3 からヨークシャー州では単一母音にランカシャー州とは大きな違いがあることが明瞭である。ヨークシャー州の方が伝統的なイングランド北部英語の発音を保持しているものと思われる。

同じランカシャー州のプレストンでは，リバプール方言の代表的特徴である NURSE 母音と SQUARE 母音の融合 (merge) が見られた（三浦，2020，pp. 22−26）。図 4 にランカスター方言の NURSE 母音と SQUARE 母音の母音図を示す。NURSE 母音には *nurse* と *curd* を，SQUARE 母音には *square* と *fare* を利用する。*square* の母音は 3 人の被験者が NURSE 母音で発音しているが，概して融合していない。ランカスターの NURSE 母音は /ɜː/ であり，SQUARE 母音は DRESS 母音と音質が同一の /ɛː/ である（長さは異なる）。ランカスターの被験者には SQUARE 母音を二重母音で発音する被験者は一人もいなかった。SQUARE 母音の単一母音化は現在の GB の傾向でもある (Carley et al., 2018, pp. 144−145; Lindsey, 2019, p. 146)。イギリス全土の教養ある話者の GB には，まだ二重母音との揺れがあるが，ランカスター方言では完全な単一母音であることが興味深い。

図 1
単一母音の F1-F2 ダイアグラム＿ランカスター (Lancaster)

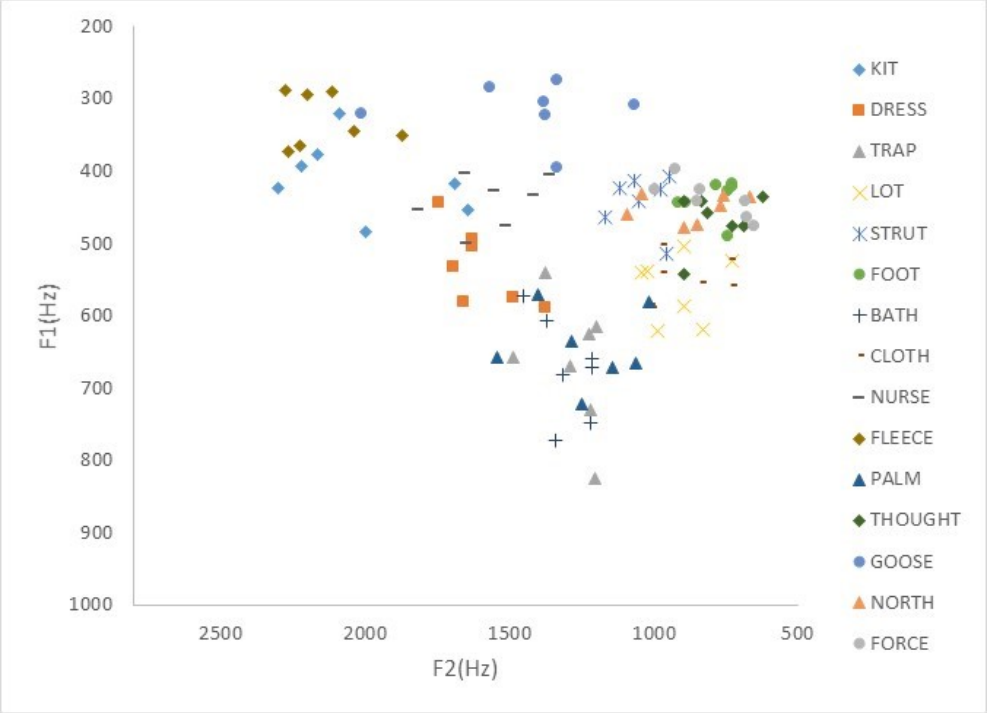


図 2

単一母音の F1-F2 ダイアグラム＿プレストン (Preston)

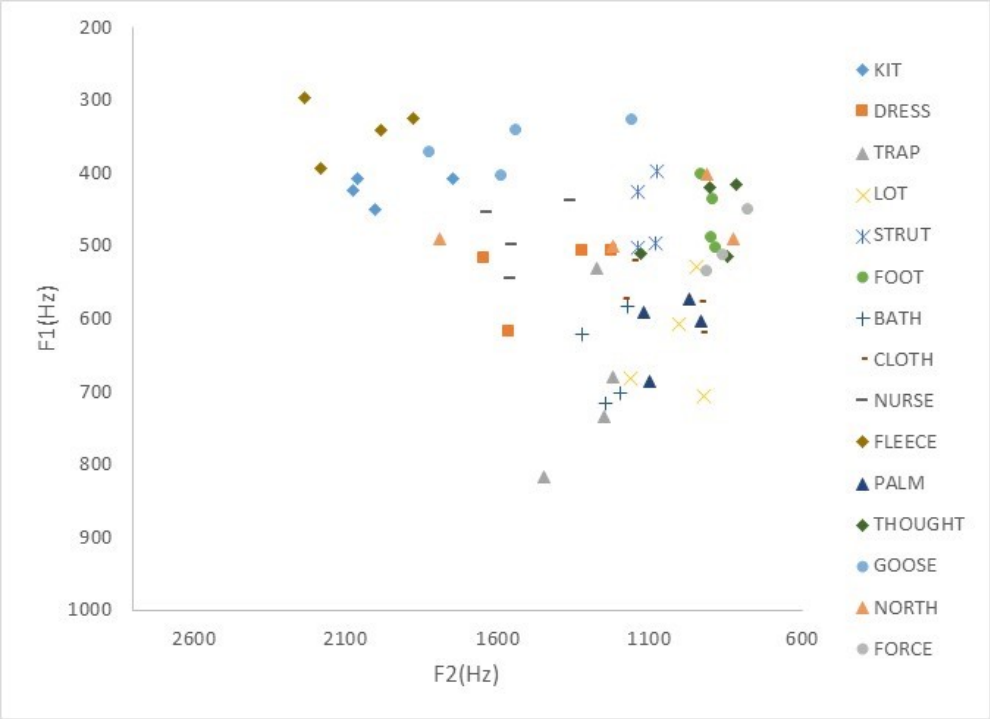


図 3

単一母音の F1-F2 ダイアグラム＿ブラッドフォード (Bradford)

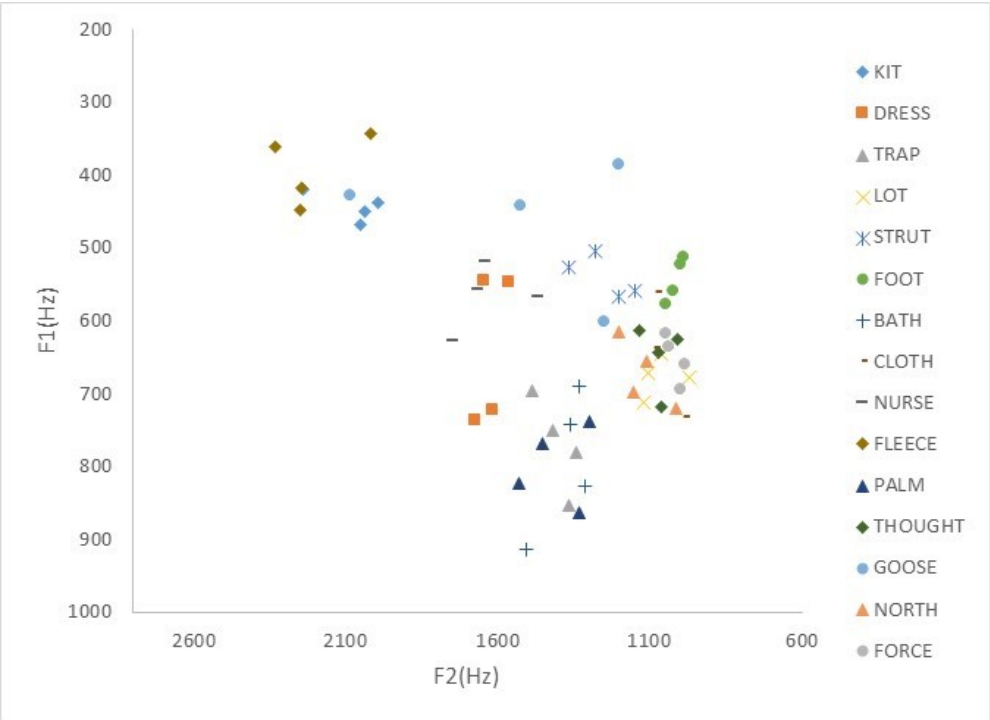
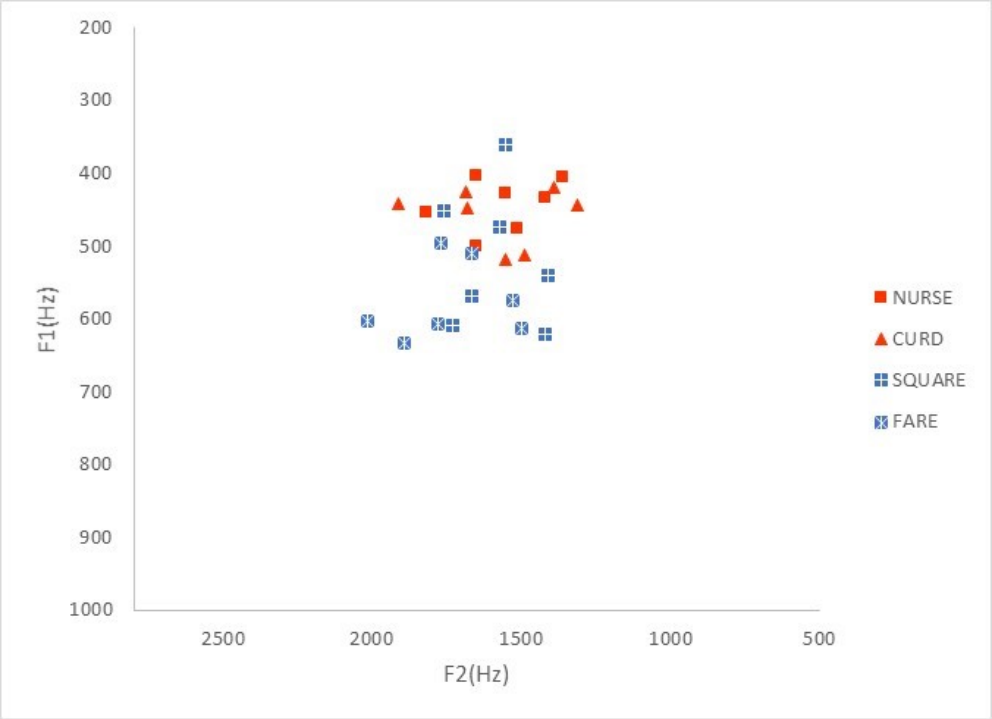


図 4

NURSE 母音と SQUARE 母音の F1-F2 ダイアグラム＿ランカスター (Lancaster)



THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音が半狭後舌母音 /oː/ で融合していることがわかりやすいように，図 5 にランカスター英語のこれらの母音をまとめて表示する。各母音の単語は三浦 (2020, p. 30 & p. 33) のプレストン及びブラッドフォードの分析と同じで，THOUGHT 語群として *thought*, *saw*, *fought* を，NORTH 語群として *north*, *horse*, *for* を，FORCE 語群として *force*, *hoarse*, *four* を用いる。図の中では同じ図形が同じ語群を表している。参考として図 6 にプレストンの同じ母音の散布図を表示する（三浦, 2020, p. 33, 図 17 を再録）。プレストンの被験者は 4 名中 2 名が R 音性的 (rhotic) 発音の話者だったので，後続の R 音の影響で F2 に多少のばらつきが見られた。ランカスターにも <r> で終わる単語だけ R 音を発音する話者が 7 名中 2 名いたが，図 5 には 3 つの母音が /oː/ で融合していることがはっきりと示されている。

ランカスター英語では NURSE 母音に 2 種類の発音があると言われている。綴り字が <ur> の単語と <ir> の単語では発音が異なるようである。その違いを例証するために図 7 を作成した。NURSE 語群として *nurse* と *curd* を，GIRL 語群として *girl* と *birth* を分析した。図 7 にはその分離が示されている。GIRL 語群の方が後寄り (retracted) になっている。

4. 二重母音

SLS に基づく二重母音の母音図を図 8 に示す。二重母音の測定ではわたり (glide) が長い方がフォルマント周波数を測定しやすいために，SLS のキーワードではない単語も含んでいる。SQUARE 母音は上述の通り，被験者全員が単一長母音で発音している。PRICE 母音 (*prize*) CHOICE 母音，MOUTH 母音，NEAR 母音，CURE 母音はすべての被験者が二重母音として発音しているが，CURE 母音だけは 2 名の被験者 (M1 と M7) の発音でわたりが小さくなっている。また二重母音の開始点も前寄りになっている。現在の GB では CURE 母音が /ɵː/ に変わりつつある (Lindsey, 2019, p. 146) から母音推移の傾向としては一致している。

FACE 母音 (*stay*) は 7 名中 2 名 (M1, M7) が単一母音で発音している。GOAT 母音は 7 名中 3 名 (M1, M2, M5) が単一母音となっている。FACE 母音と GOAT 母音が単一長母音 (/eː/ と /oː/) として発音される特徴は伝統的なイングランド北部英語とみなされているが，今回のランカスターの被験者の中では二重母音で発音する割合の方が大きいことがわかった。

図 9 に FACE 母音 3 語の F1−F2 ダイアグラムを示す。*face* では 7 名中 4 名 (M1, M3, M4, M6) が，*stay* では 7 名中 5 名 (M2, M3, M4, M5, M6) が，*fatal* では 7 名中 4 名 (M3, M4, M5, M6) が，二重母音で発音している。以前の調査ではプレストンもリバプールも二重母音の方が優勢だった。それに対して，図 10 のブラッドフォード方言（ヨークシャー州）では，4 名の被験者全員が単一長母音で発音していた。

FACE 母音についてはさらに興味深いテーマがある。Barras (2015, p. 275) 及び Wells (1982, p. 189 & p. 357) によれば，「旧軟口蓋摩擦音」(old velar fricative) と呼ばれる ME まで /x/ と発音されていた綴り字 <gh> をもつ語群の FACE 母音がイングランド北部英語では，/ɛɪ/ と発音されて，他の FACE 母音の単一長母音と対立するようである。そこで今回の調査では音読用語彙リスト (付録の Group A 参照) にこの対立を調べるための単語を含めて，図 11 を作成した。

WAY 語群には *way*, *wait*, *strait* を，WEIGH 語群には *weigh*, *weight*, *eight*, *straight* を使用した。WAY 語群に二重母音を使用する発音は，上述の FACE 母音 3 語の割合と同様に，*wait* では 7 名中 2 名 (M3, M6)，*straight* では 7 名中 5 名 (M1, M3, M4, M5, M6)，*way* では 7 名中 4 名 (M2, M4, M5, M6) であった。ところがやはり WEIGH 語群の方は圧倒的に二重母音で発音されていた。しかし，M7 一人だけは，*eight* 以外の 3 語 (*weigh*, *weight*, *straight*) では単一長母音を使っていた。M7 は非常に訛りの強い (broad) ランカスター方言話者であった。

図 5

THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音の F1-F2 ダイアグラム
__ランカスター (Lancaster)

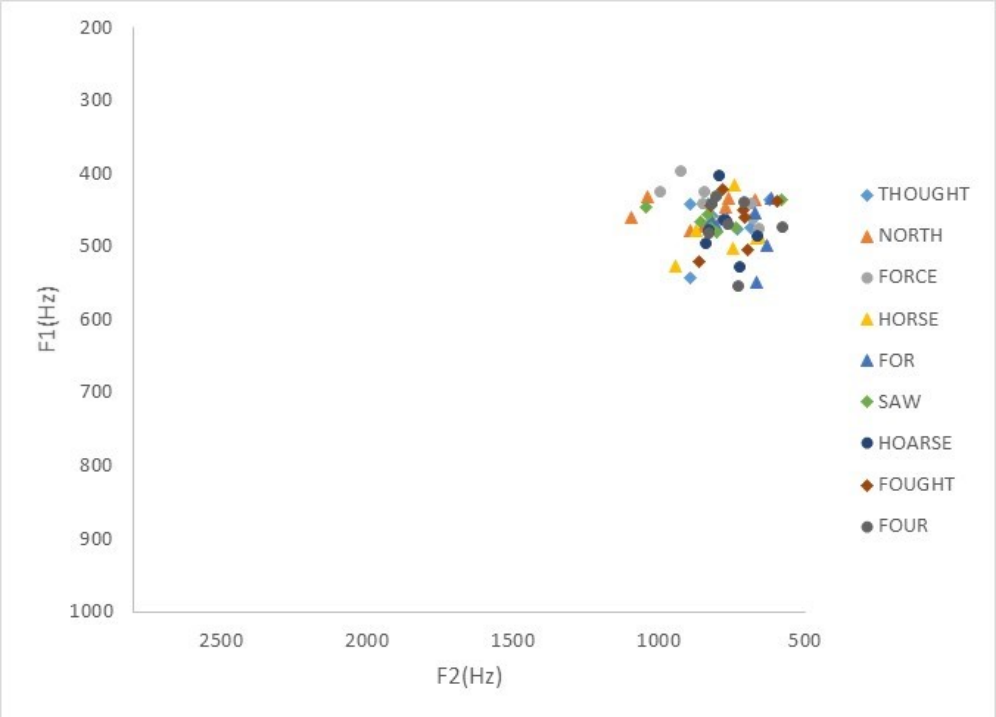


図 6

THOUGHT 母音と NORTH 母音と FORCE 母音の F1-F2 ダイアグラム
__プレストン（Preston）

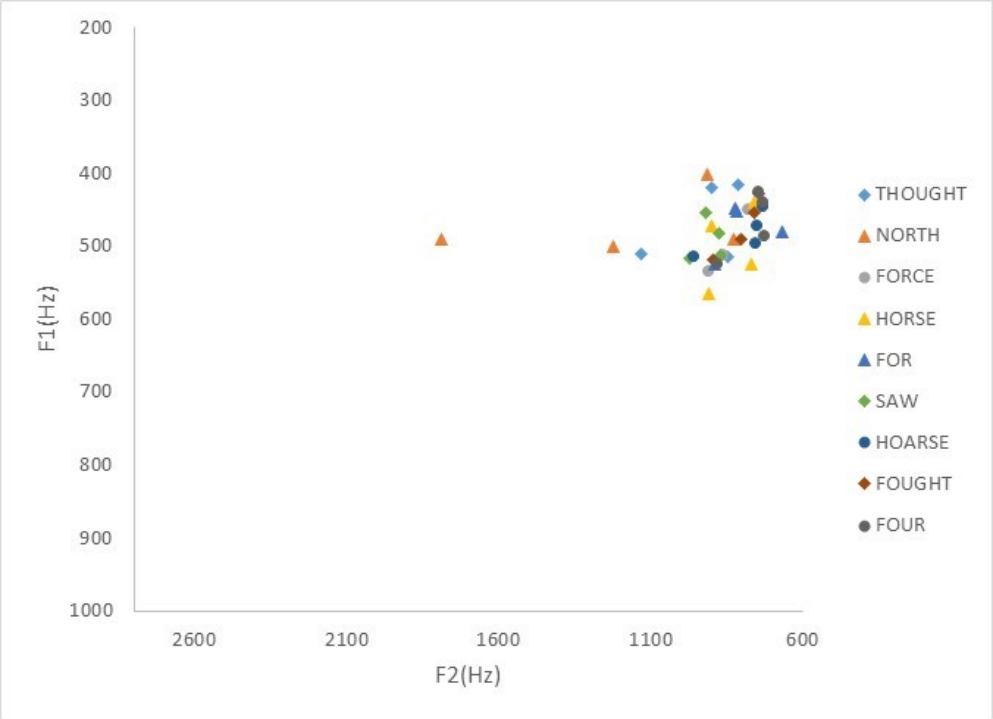


図 7

NURSE 語群と GIRL 語群の F1-F2 ダイアグラム__ランカスター (Lancaster)

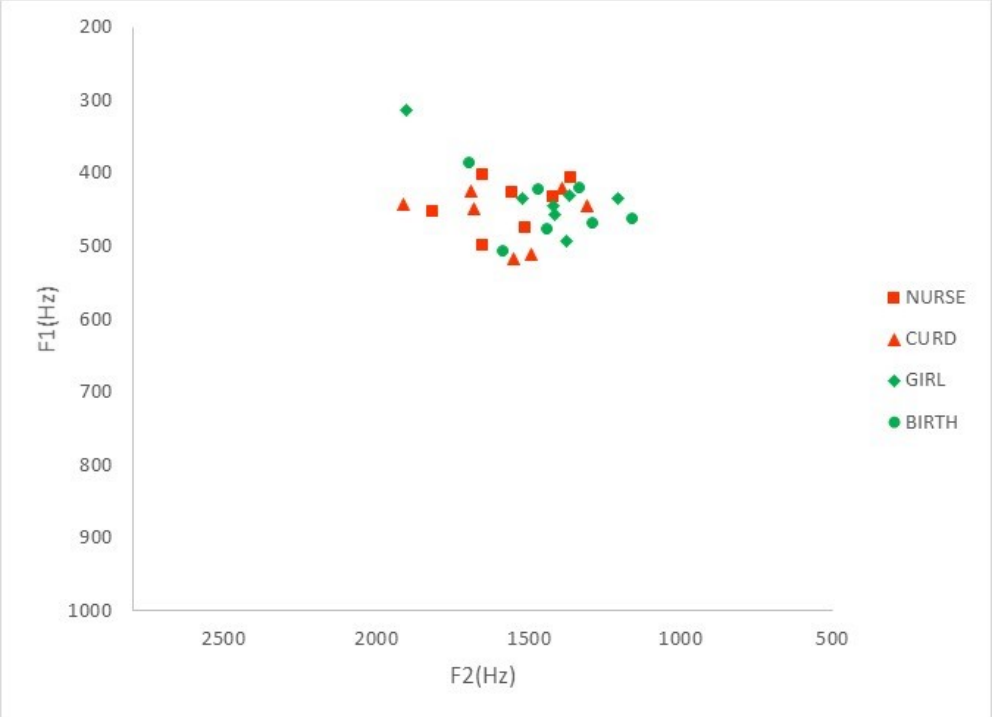


図 8

二重母音の F1-F2 ダイアグラム＿ランカスター (Lancaster)

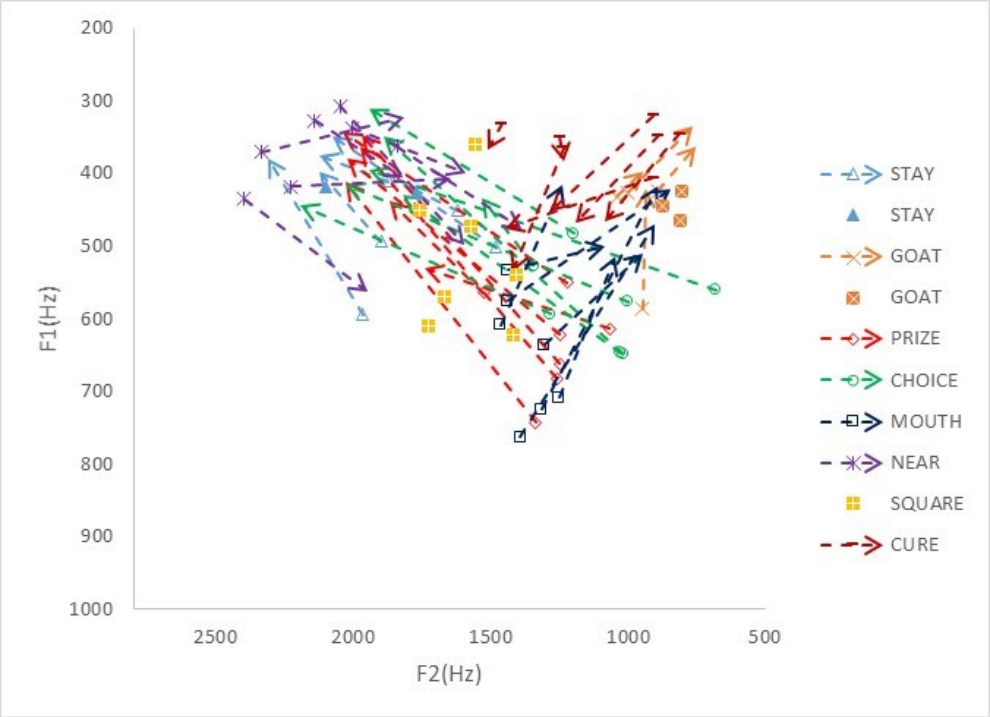


図 9

FACE 母音の F1-F2 ダイアグラム＿ランカスター (Lancaster)

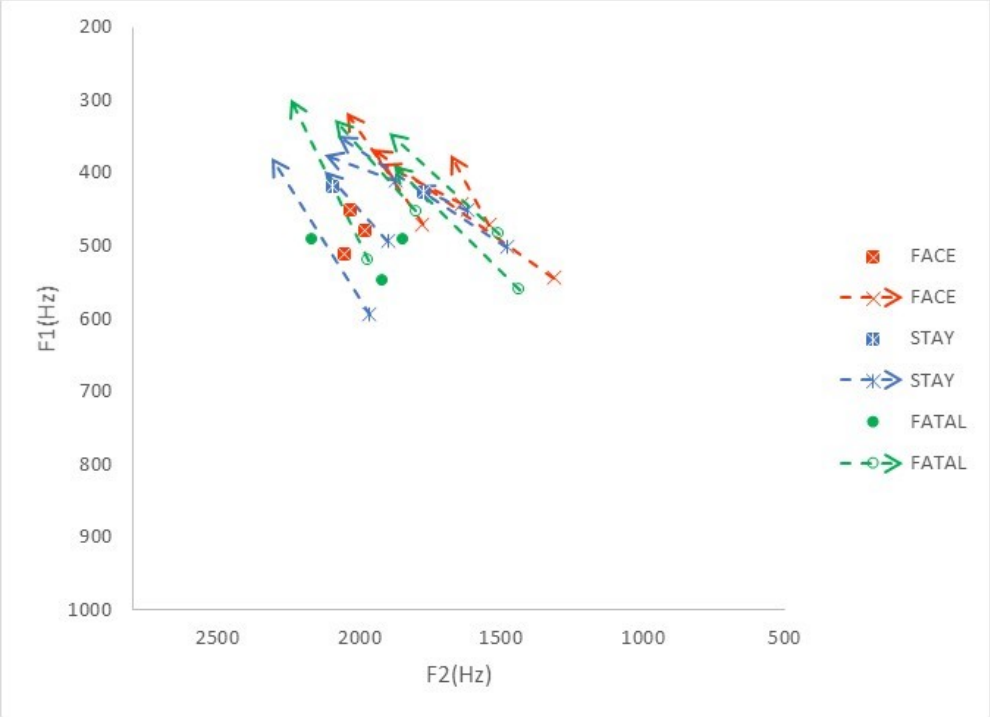


図 10

FACE 母音の F1-F2 ダイアグラム＿ブラッドフォード (Bradford)

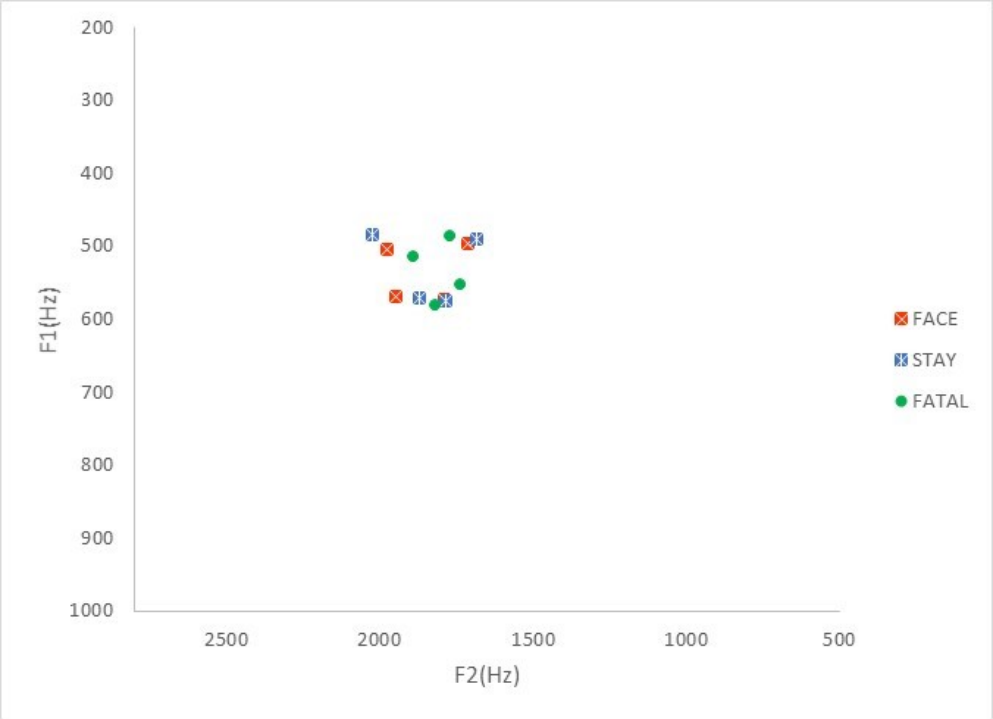


図 11

WAY 語群と WEIGHT 語群の F1-F2 ダイアグラム＿ランカスター (Lancaster)

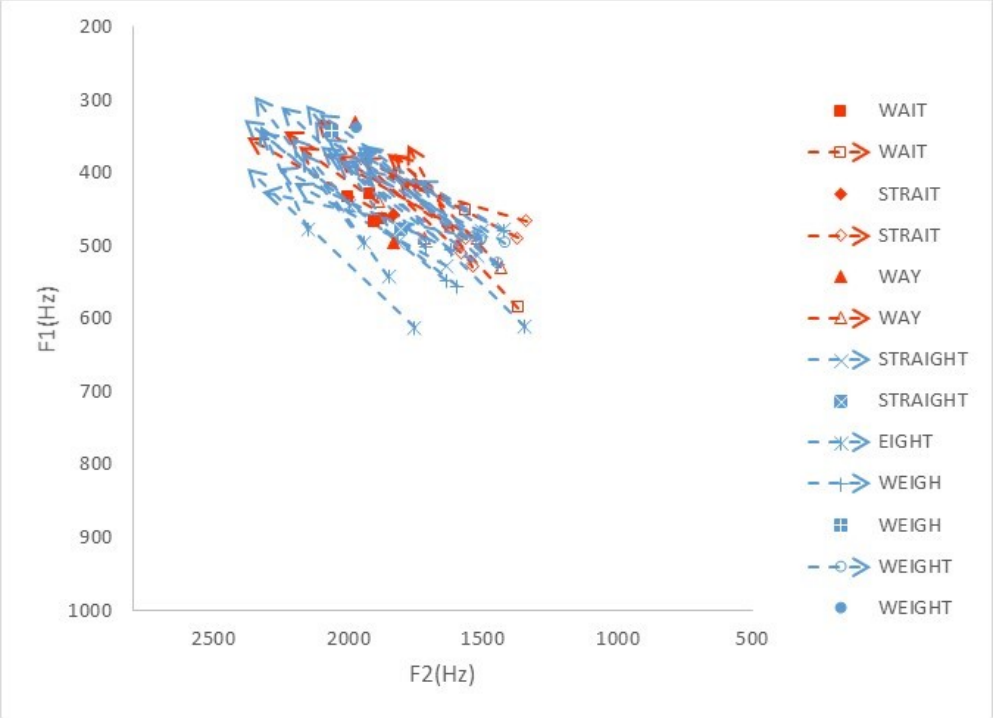


図 12

GOAT 母音の F1-F2 ダイアグラム＿ランカスター (Lancaster)

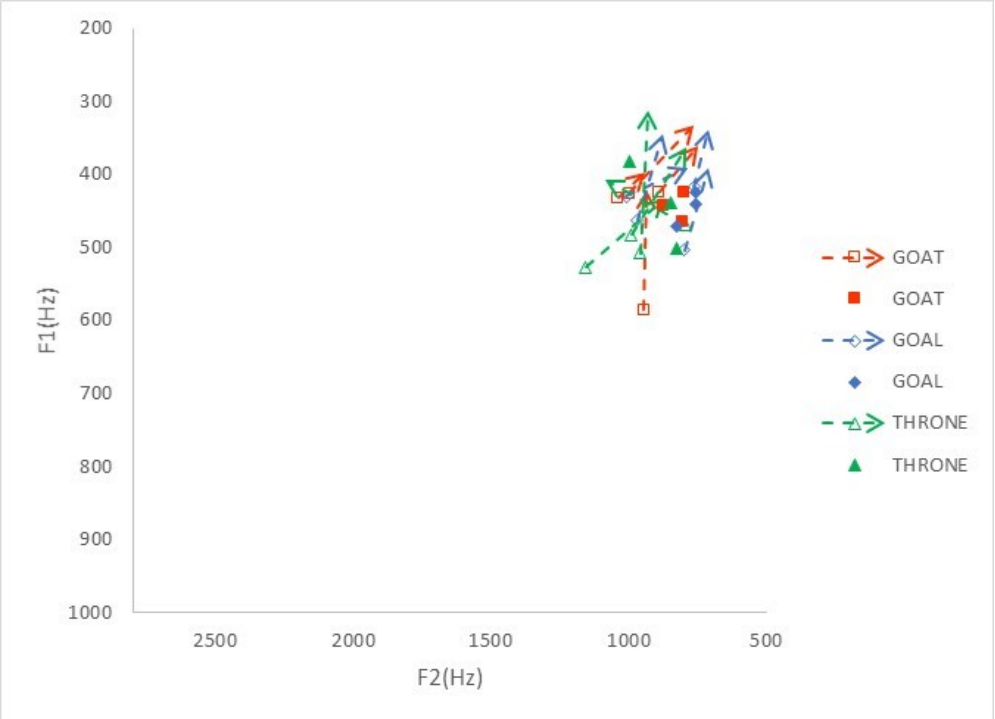


図 13

NEAR 母音の F1-F2 ダイアグラム＿ランカスター (Lancaster)

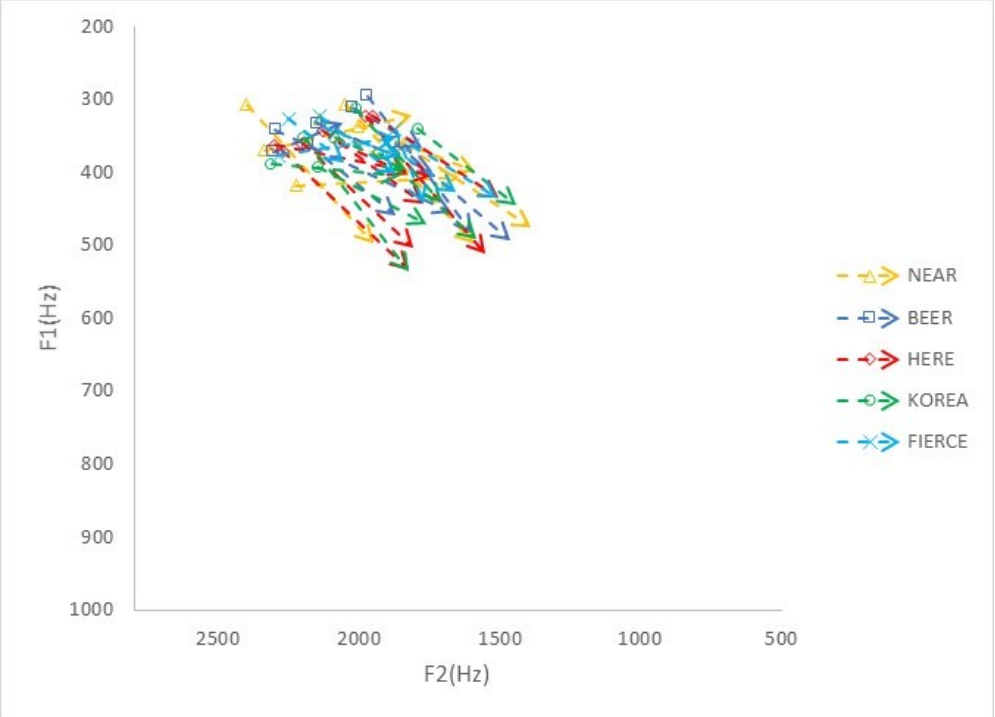


図 14

CURE 母音の F1-F2 ダイアグラム＿ランカスター (Lancaster)

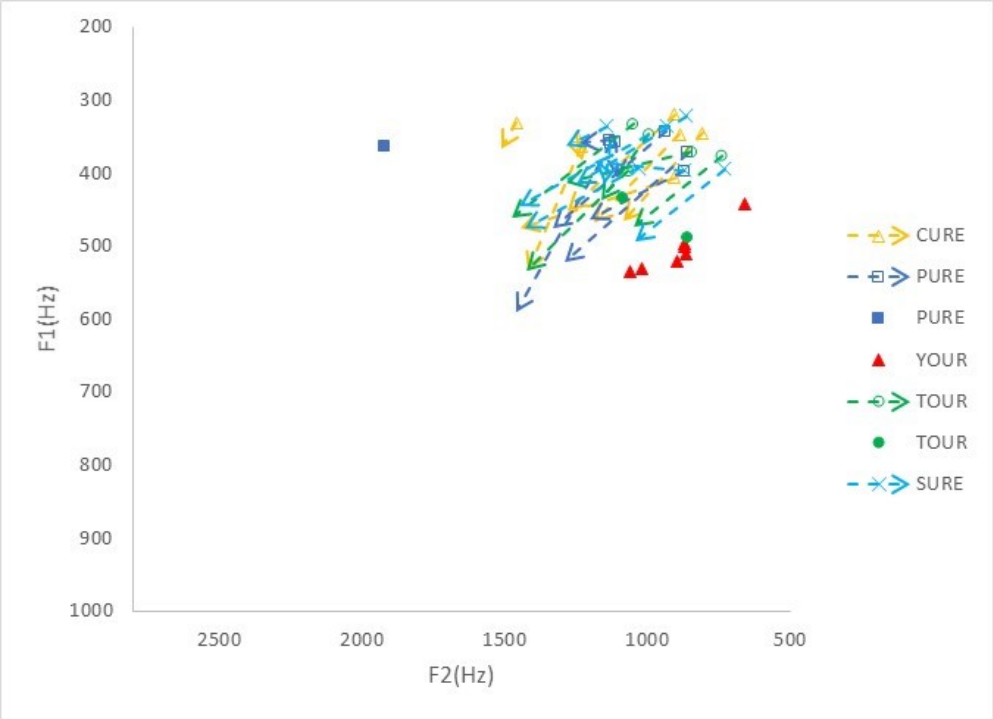


図 12 には GOAT 母音の 3 つの単語，*goat*, *goal*, *throne* の母音図を提示する。3 語すべてに共通して，二重母音を使用した被験者は 7 名中 4 名 (M3, M4, M6, M7) であった。残りの 3 名が伝統的なイングランド北部英語である単一母音を保持している。しかし，今回の被験者の中で最も訛りが強く，WEIGH 語群の 4 語中 3 語に単一母音を使っていた M7 が二重母音を用いたということで方言（発音変種）研究の複雑さを実感させられた。

現在の GB に広まっている暗い /l/ (dark /l/) の前で GOAT 母音の開始点が後舌広母音化して /ɒʊ/ になる変化 (Carley et al., 2018, p. 1 & p. 143) は，まだランカスターにまで伝播していないことが，図 12 の *goal* の分析から明らかになった。

図 13 は NEAR 母音を分析したものである。*near*, *beer*, *here*, *Korea*, *fierce* の母音を表示した。三浦 (2020, pp. 34−38) ではブラッドフォードの被験者は皆，保守的なイングランド北部方言を維持していて，NEAR 母音を 2 音節の /iːə/ で発音していた。しかし，図 13 と筆者の聴覚印象からランカスターではすべての被験者が NEAR 母音を 1 音節の二重母音で発音している。GB では NEAR 母音は /ɪː/ に変わりつつあるので，ランカスター英語のこの母音はちょうど中間地点，つまり，20 世紀の RP のような位置にあると言える。

このように考えると，図 14 も興味深く見えてくる。図 14 は CURE 母音の母音図で，*cure*, *pure*, *your*, *tour*, *sure* を表示している。*your* だけはすべての被験者が単一母音になっているが，*cure* と *sure* では全員が二重母音，*cure* では 1 人 (M7)，*tour* では 2 人 (M1, M7) が単一母音を用いている。M7 は調査票のアンケートに自身の方言を訛りの強いランカスター北部方言であると書いているが，やはり一人だけ異質である。収録時に発音が極めて異なることに気付き，さまざまなインタビューをして収録時間が 2 時間を超えた。彼は鉄工所の経営者で自分の仲間は皆彼と同じ発音であると言っていた。調査の最終日に見つけた被験者だったので，彼の仲間の収録はできなかったが，ランカスターに限らず，イングランド北部地方の北部は母音体系や伝

統的なイングランド北部英語の保持の度合いが異なるものと思われる。それにしても 20 世紀後半の RP の場合は，*your* と同時に *sure* も単一母音に変化したが，ランカスターでは *sure* を単一母音で発音する被験者が 1 人もいないということに興味が湧いてくる。

5. おわりに

本稿での考察によって現在のランカスター英語の顕著な母音特徴を把握することができた。しかし，分析が終わっていないデータもたくさん残っている。2017 年から 2019 年の 3 年間，イングランド北部英語の調査をしてきたが，ますます複雑さが増すばかりである。イングランド北部英語の全容を把握するには，ヨークシャーの北部やカンブリア，そして 2013 年に一部分のみ調査したジョーディ (Geordie) と呼ばれるニューカッスル等，さらにウェスト・ミッドランズ等も含めて考察する必要がある。

参考文献

Barras, W. (2015). Lancashire. In R. Hickey (Ed.), *Researching Northern English* (pp. 271–292). Amsterdam: John Benjamins.

Beal, J. (2008). English dialects in the North of England: phonology. In B. Kortmann & C. Upton (Eds.), *Varieties of English 1: the British Isles* (pp. 122–144). Berlin: Mouton de Gruyter.

Boersma, P. & Weenink, D. (2019). Praat: doing phonetics by computer [Computer program]. Version 6.1.02, retrieved from https://www.fon.hum.uva.nl/praat/

Carley, P., Mees, I. M. & Collins, B. (2018). *English Phonetics and Pronunciation Practice*. Abingdon: Routledge.（三浦弘訳 (2021).『イギリス英語音声学』 東京：大修館書店）

Foulkes, P. & Docherty, G. (Eds.). (1999) *Urban Voices*. London: Arnold.

Hickey, R. (2015). The North of England and Northern English. In R. Hickey (Ed.), *Researching Northern English* (pp. 1–24). Amsterdam: John Benjamins.

Lindsey, G. (2019). *English After RP: Standard British Pronunciation Today*. London: Palgrave Macmillan.

三浦弘 (2020).「イングランド北部英語における母音の諸特徴～リバプール，マン島，プレストン，ブラッドフォードを比較して～」『実践英語音声学』 *1*, 19–41.

Wales, K. (2006). *Northern English: A Cultural and Social History*. Cambridge: Cambridge University Press.

Wells, J. C. (1982). *Accents of English* (3 vols). Cambridge: Cambridge University Press.

付録 (Appendix)：調査語彙リスト (List of Words, 2019)

Please read the following words aloud twice each in the carrier sentence below.

Say _____, please.
Say _____, please.

<Group A> ***Vertically***

A1	A2	A3	A4	A5
SORRY	KOREA	CURD	HORSE	SHAW
CENTRE	CALM	FARE	PURE	TOUR
TOOTH	CAN'T	AUNT	SHORE	FORK
FOGGY	PASS	FLOUR	FOR	SORE
TOO	CAB	NOUN	YOUR	TALK
ORDER	FATHER	CARED	SAW	FOUR
HEAVY	CHANCE	FLYER	HOARSE	CORD
TOOT	TAP	FAIR	FOUGHT	SURE
BUD	ARCH	HALF	CUT	SOAR
PUT	PATH	NINE	COULD	FAR
HERE	FIERCE	PART	EIGHT	WEIGHT
WAIT	STRAIGHT	STRAIT	WEIGH	WAY
DOCTOR	CENTRE	MASTER	PLASTER	HUNTER

<Group B> ***Vertically***

B1	B2	B3	B4	B5
KIT	FLEECE	CHOICE	COMMA	TREACLE
DRESS	FACE	MOUTH	FREE	SING
HEAD	STAY	POWER	METER	GOING
NEVER	MEAT	NEAR	FATAL	BEETLE
TRAP	PALM	BEER	EIGHTY-EIGHT	THRONE
LOT	THOUGHT	SQUARE	CARTER	BEAGLE
STRUT	GOAT	START	DAUGHTER	ROLLS
ONE	GOAL	BIRTH	FREES	NOTHING
FOOT	MORE	BERTH	EITHER	WITH
BATH	GOOSE	NORTH	OLD	US
AFTER	GHOUL	FORCE	BRILLIANT	NEITHER
DANCE	BOOK	CURE	FREEZE	TUESDAY
CLOTH	PRICE	HAPPY	CLEAN	
NURSE	PRIZE	LETTER	THROAT	
GIRL	FIRE	HORSES	GLEAM	

Vowel features of Lancaster accent of English

Hiroshi Miura
Senshu University

Abstract

This paper reports on the present-day vowel features of Lancaster (Lancashire) accent of English in comparison with vowels of Preston (Lancashire) and Bradford (West Yorkshire) accents. All the data are from original recordings made on field trips in 2018 and 2019. The vowels are shown on F1-F2 vowel diagrams, and the recent developments and the preservation of traditional Northern English accents discussed. (1) GOOSE is a central vowel. (2) Diphthongization of FACE and GOAT is in progress. (3) FOOT is [ʊ] and STRUT is [ɵ] in Lancaster accent although Northern English did not undergo the FOOT-STRUT Split. (4) PALM is [aː], which is different from a retracted vowel [ɑː] as in Preston and eastern Lancashire. The paper also discusses the phonemic and allophonic differences of Lancaster English vowels historically and orthographically.